

自己モニタリングが英語学習に及ぼす効果について (第2報)

杉村 藍・武岡 さおり・尾崎 正弘*

The Effects of Self-Monitoring on English Learning (II)

Ai SUGIMURA, Saori TAKEOKA and Masahiro OZAKI

要 旨

少子化傾向の中で、大学では入学希望者が全員入学できる時代が到来した。その結果、学習者の学習意欲の低下が大きな問題となっている。しかし、学習意欲に関する調査・研究はその取り組みが始まったばかりであり、効果的な教育指導法の開発までには至っていない。

著者らは、過去に効果的な学習指導法に関する研究やWebを利用した学習教材開発などの研究を実施してきた。それらの研究成果を踏まえ、講義系科目や英語教育において、学習者が自己の学習能力を把握しながら学習を進める自己モニタリング学習の実験を実施した。それら学習実験の結果から、自己モニタリング学習を実施することにより学習成績の向上が認められた。

本論文では、過去に実施した研究成果にもとづいた研究を進め、習熟度別クラス編成による自己モニタリング学習実験を実施し、その成果と問題点を分析した。

今後は、それらの成果をもとにWeb教材を活用した新しい学習実験へと発展させたいと考えている。

はじめに

少子化傾向の中で、大学では入学希望者が全員入学できる時代が到来した。また、ゆとり教育による影響などもあり、大学生の学習意欲の低下が大きな問題となっている。しかし、学習意欲に関する調査・研究^{1)~5)}はその取り組みが始まったばかりであり、効果的な教育指導法の開発までには至っていない。

著者らは、効果的な学習指導法に関する研究やWebを利用した学習教材開発など、過去においていろいろな研究^{6)~10)}を実施してきた。それらの研究成果を踏まえ、学習者の学習意欲の向上を図る新しい教授法の開発を目標としている。そのための学習実験法として講義系科目や英語教育において、学習者が自己の学習能力を把握しながら学習を進める自己モニタリング学習の実験を実施した。

多数人講義科目に対する自己モニタリング学習の実験を実施した結果、期末テスト(講義内容に関する部分)の平均点に関して実験群には有意差がみられた。特に、自己モニタリング学

* 中部大学経営情報学部

習を実施した実験群の中で、自己モニタリング学習を実施した学生とそうでない学生では、期末テストの平均点に明らかな有意差が認められた。この実験結果から、自己モニタリング学習によって学生が自分の理解できない箇所を把握し、自主的にその都度確認作業を進めていくこと、つまり学習レベルを自ら把握することにより、学習成績の向上が期待できると考えた。⁸⁾

さらに、英語学習においても自己モニタリング学習による学習実験を試みた。そして、多人数講義科目において学習効果を上げた自己モニタリング学習が、少人数クラス編成の演習科目である英語学習においてはどのような学習効果を得られるかを分析した。英語学習実験では、学習者の取り組みや意欲と学習結果(成績)との関連を明らかにするため、前期学習(通常授業)に続く後期学習において自己モニタリング学習の実験を実施した。

その実験結果においても、著者らが提案した自己モニタリング学習が学習者に学習意欲をもたらす教授法として有効であると考えられた。⁹⁾

著者らは、異なる視点から過去3回にわたり自己モニタリング学習の実験⁸⁾⁻¹⁰⁾を繰り返し、それぞれ過去の実験結果から研究成果を積み重ねている。今後、さらに実験を繰り返してより多くの分析データを採取し、学習者に対して効果的な学習指導法を提案する必要があると考えた。

その1つに、学習者によって学習意欲が異なる問題がある。クラス単位で授業を行う際、学習者間で学習意欲に極端な差があったり、また特にそれが低かった場合、個別の学習者だけでなく他の学習者、ひいてはクラス全体の学習意欲に影響を与え得ることが考えられる。

本論文では、あらかじめ習熟度別にクラスを編成し、さらにそれら習熟度別編成クラスの中で自己モニタリング学習実験を実施することによって、自己モニタリング学習と習熟度の両方を視野に入れた学習意欲との関連を調査することにした。そして、英語教育において自己モニタリング学習を採用することにより、学習者に調和のとれた授業内学習を提供するとともにより効果的な英語教授法を開発することを目的とした。

さらに本論文では、過去に実施した自己モニタリング学習による学習実験の成果と問題点を整理し、習熟度別編成クラスにおける自己モニタリング学習実験の結果を分析するとともに、実験の中で実施したアンケート調査の結果についても併せて分析評価した。

自己モニタリング学習

自己モニタリングとは、学校や職場などにおける人間関係、つまり社会的環境の中で自分自身の行動や感情をモニタし、自らの行動や欲求をコントロールしようとする行為である。自己モニタリングは本来社会性の用語として用いられることが多く、対人関係などの改善等の訓練にも採用される手法である。また、医療にも多く導入され、特に、自分で健康を管理する必要がある患者や精神的な疾患を持つ患者に対しては、有効な療法となっている。

さらに、自己モニタリングは企業活動の中で一般的に用いられており、証券会社の財務の健全性を測る指標として自己資本規制比率や、一般企業の業務改善や財務監査などの手法として一般的に用いられている。教育の現場でも自己モニタリング実験²⁾⁻⁴⁾が行われているものの、それらの多くは学校で集団活動や情緒的な訓練などの対人関係の改善に関するテーマである。

本論文では、英語教育の中に自己モニタリング学習を採用し、学習者に調和のとれた授業内学習と自主学習を促すことにより、より効果的な英語教育における教授法を開発することを目的とした。

大学で実施する授業は、通常、テキストを用いた対面授業である。時には、小テストなどを

実施して毎授業後に学習内容の理解度の確認を行う。また、理解が不十分であった部分を含め、学習内容について復習して理解を深めるように指示する。しかし、授業時間以外の学習については、自主的に学習することを指導するのみであり、特に強制しないのが通例である。学習内容を理解したかどうかは、期末テストで総合的に評価する。このような教授法では、授業時間外の学習行動は学習者の自主性に依存するため、学習者の学習能力や学習意欲により学習結果に大きな差が生じる。そこで、学習効果の向上を図るために、分かり易い教材開発、コンピュータやWebを採用した授業方法の工夫など、いろいろな教授法の研究開発が試みられ、それなりの成果を挙げているものの、いずれも多くの問題点を残している。

そこで、現在実施している英語教育の中で、毎時間の授業内容の理解や小テストについての自己採点（不正解問題の確認）、授業時間外における学習内容の確認、それに伴う自己学習（小テストの不正解問題の確認・理解など）、学習状況の自己管理（確認票の作成）など、学習者に自己管理させる自己モニタリング学習を提案する。

提案する英語教育における自己モニタリング学習の流れを図1に示す。

本研究では、通常実施されている大学の授業方法の流れに自己モニタリング学習（図1の太枠部分）を加えた。図から、毎授業時間内に実施する小テストの自己採点、学習内容の自己確認、授業時間外に行う学習理解度の把握、それによる予習・復習など、学習者が自らの学習状況を全て自己管理する。この方法によって、学習者の学習意欲の向上を図ることができるかどうかを実験した。自己モニタリング学習が実施されているかどうかを確認するために、各学習者に対して、毎授業時間に確認票を、学期末に毎回の確認票の結果を記入した学習記録簿としての確認シートを提出するように指示した。

これら一連の学習行動は、決して強制的なものではないので、学習者の自主的な自己管理の仕方が、どのように学習結果に反映したかを分析することにした。

本研究のように、実際に学習環境の中で繰り返し実験が行われる事例は少なく、自己モニタリング学習が学習の効率化に直ちに結びつくと考えすることは難しい。しかし、本研究では学習に対する動機づけを目的として自己モニタリング学習を採用しており、学習者が自分の学習行動をモニタすることにより、より良い学習行動に反映させることを目標とした。

さらに、その時の学習者の能力や学習レベル、クラスなど、学習者を取り巻く教育環境の変化が、自己モニタリング学習にどのような影響を与えるかを調査することにした。学習者に対する学習環境をどのように設定するかは重要な要因であると考え。2003、2004年度に実施した自己モニタリング学習の実験結果^{8)~10)}からは、自己モニタリング学習が学習意欲の向上に結びつくというはっきりした成果を得ることができなかった。その理由の1つに、一般に「勉強嫌い」といわれる、積極的に学習に取り組む意欲のない学習者に対する学習効果が問題であった。つまり、自己モニタリング学習は、自己の学習内容を学習者自らが把握しながら学習を進める手法であり、最初から学習意欲のない学習者に対しては学習効果をあまり期待できないの

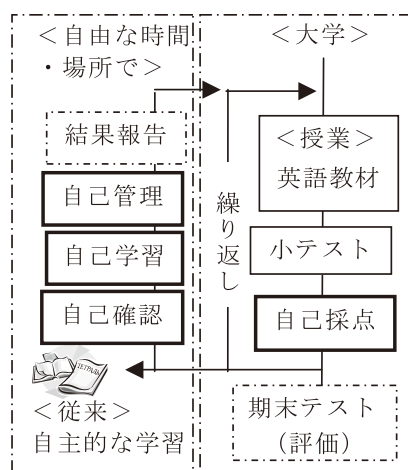


図1 自己モニタリング学習の流れ

ではないかと考えられるのである。自己モニタリング学習を、学習者間の対人関係や学習者が置かれている教育環境をモニタリングすることも含めた総合的な学習状況の自己管理ととらえ、その点についても分析対象にした。

本論文では、次章に示すように習熟度別クラス編成を実施し、能力別にクラス編成された学習環境が自己モニタリング学習にどのような影響を与えるのかを分析した。

学習実験の概要

自己モニタリング学習実験に先立ち、学習者を習熟度別にA、B、Cの3クラスに分け、1年を通じて自己モニタリング学習実験を実施した。習熟度別クラス編成と学習実験の方法は以下のとおりである。

(1)習熟度別クラス編成

表1に示すように授業内容やテスト、各授業後に実施する小テストを習熟度に応じて、A(上位)、B(中位)、C(下位)の3クラスに分けた習熟度別クラス編成を実施した。習熟度別クラス編成には、1年次の成績のほか、財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会主催のTOEIC IP及びTOEIC Bridge等の試験結果を利用した。そして、自己モニタリング学習実験の中では、各クラスに対する英語能力の目安としてAクラスが英検2級以上、Bクラスが英検準2級程度、Cクラスが英検3級程度を想定した授業やテストを実施した。

表1 習熟度別クラス編成

習熟度別 クラス	授業&テストのレベル	小テスト	
		基本問題	応用問題
A	英検2級以上	10	10
B	英検準2級程度	15	5
C	英検3級程度	20	0

習熟度別クラスで使用した教材は、Aクラスが『エイザーの基本英文法・中級編』下巻(ベティ・S・エイザー著、プレントイスホール出版編集部訳、プレントイスホール出版、1998年)、B、Cクラスが『エイザーの基本英文法・中級編』上巻であり、同一シリーズをクラスレベルによって使い分け、同じテキストを利用したBクラスとCクラスでは、授業進度を変え、Cクラスでは解説や基礎練習問題により時間を割くようにした。

また、自己モニタリング学習のために、前期・後期を通して毎授業時間に小テストを実施した。小テストは基本問題と応用問題に分け、習熟度に応じて表1のように各クラスに配分した。基本問題は毎時間に実施した授業内容に沿った問題であり、応用問題は毎時間の授業内容を使用した実力問題である。各クラスで実施した小テストの内容は以下のとおりである。

Aクラスは、直接授業内容に関するもの10問、授業内容に関連した文法事項に関する応用問題(英検2級～準1級程度)10問の合計20問である。Bクラスは、直接授業内容に関するもの15問、授業内容に関連した文法事項に関する応用問題(英検準2級～2級程度)5問の合計20問である。Cクラスは、直接授業内容に関するもののみ全20問である。

また、学習成果を判定する目的で各期に実施したテストは、前期授業開始前に実施した前期プレテスト、前期授業終了時に実施した前期末テスト、後期開始時に実施した後期プレテスト、後期授業終了時に実施した後期末テストの4種類であり、習熟度別クラスに応じて次のような内容で実施した。

前期プレテストは3クラスとも同じ問題であり、内容は英検3級程度5問、英検準2級程度15問、英検2級程度5問の合計25問を出題した。

前期末・後期末テストはクラスごとに異なり、テキストに即した内容でA、Bクラスでは小テストで出題した応用問題は含まない。同じテキストを使用していたB、Cクラスではそれぞれ出題量が異なる。(Cの方が少ない)

後期プレテストは前期末テストの復習として、それらの内容から一部を出題した。学生にはプレテストの内容は事前に知らせず、前期末テストで確認した学習内容をどれだけ実際に身につけているかを判定した。

そのように、各クラスにより習熟度別に異なった学習内容に基づいた自己モニタリング学習実験を実施し、習熟度別クラスにおける自己モニタリング学習の効果や学習者の学習意欲との関連を調査した。

(2)学習実験の方法

- ① 実験期間：平成17年度前・後期（前期：4月～7月、後期：9月下旬～1月）
- ② 実験日時：Aクラス＝木曜日1・2時限（9：00～10：30）、Bクラス＝火曜日3・4時限（10：40～12：10）、Cクラス＝火曜日5・6時限（13：00～14：30）
- ③ 学習者：名古屋女子大学短期大学部英語科2年次生
前期 Aクラス＝21名、Bクラス＝41名、Cクラス＝12名、合計74名
後期 Aクラス＝20名、Bクラス＝37名、Cクラス＝15名、合計72名
前期末テストの結果により、後期は若干クラスの入れ替えを行った。入れ替えに関してはテスト結果のほか、面談により本人の希望も取り入れている。なお、退学等により後期学習者数が減少している。
- ④ 授業科目：前期「英語演習2 a」、後期「英語演習2 b」、ともに必修科目
- ⑤ 実験方法の詳細：
 - (A) 毎回授業終了時に授業内容の復習を兼ねた小テストを実施。
 - (B) 小テストの解答後、学生自身が小テストの自己採点。
 - (C) 小テストの正答数、誤答数を「確認票」に記入。AクラスとBクラスに関しては、基本問題と応用問題についてそれぞれ分けて「確認票」に記入。
 - (D) 誤解答した問題について復習することを義務付け、復習して確認した数、そのうち理解できた数を「確認票」に記入。
 - (E) さらに、自主学习として発展的に学習した場合はその項目についても「確認票」に記入。
 - (F) 「確認票」（提出）と同じ内容を、「確認シート」（自己管理）に記入。
 - (G) 自主学习により復習した結果を記入した「確認票」を翌週授業時に提出。
- ⑥ 実験手続き：
 - (A) 授業開始時 授業内容、授業目標、評価基準等についての説明。自己モニタリング学習について説明。「確認票」および「確認シート」の説明。具体的には、

- a) 毎回小テストを実施する。その結果を「確認票」に記入して次回の授業で提出。
 - b) 小テストの結果、誤解答問題は必ず次週までに確認を行い、さらに発展的に学習した場合はその内容についても記入すること。
 - c) 小テストの結果や学習内容の理解度を把握・自己管理するために、「確認シート」を配布するので、これに「確認票」の内容を転記し、各自で保管すること。
 - d) 「確認シート」は各自で責任をもって保管し、最終授業時に提出すること。この「確認シート」の保管は自己管理能力を示すもので、原則として再発行しないので、各自できちんと管理すること。
- (B) 毎回の授業 授業終了時に小テストの実施。学生による自己採点。「確認票」は持ち帰り、復習や自主学習の結果を記入。「確認シート」に転記後、翌週授業時に「確認票」を提出。
- (C) 最終授業 期末テストの実施、前回授業時の確認票と確認シートの提出。

テスト結果の分析

実験授業の中で実施したテスト結果を分析した。また、学習者のアンケート結果から、各学習者が実験授業の内容、各自の学習成果、テスト結果などをどのようにとらえているかを調査し、各テスト結果との関連を分析した。各クラスは習熟度別に編成されており、前期プレテストを除き、それぞれのクラスで使用したテキストの内容や各テストのレベルが異なるので、テストの得点だけで単純に評価することはできないが、アンケート結果とテスト結果、各テスト間の関連などをもとに、テスト結果を分析した。

図2は、3クラスにおける各テストの平均点を示したものである。前期授業開始時に実施した前期プレテスト(図中、「前期プレ」)の結果は、テストの内容が3クラスとも同一であるため、Aクラスの平均点(69.7)が最も高く、ついでBクラスが53.6、Cクラスが49.8と最も低く、習熟度別クラス編成を反映したものであった。前期プレテストの結果から、Aクラスはレベルの高い独自のテキストを採用し、B、Cクラスは得点にそれほど差がなく、同じテキストを用いて授業の進度に差をつけたのは適切な判断であったといえる。

前期末テストの結果は、3クラスとも平均点が上昇しているものの、Aクラスの平均点が77.1、Bクラスが69.1、Cクラスが55.3であり、前期プレテストに対する伸び率はBクラスが最も高い。

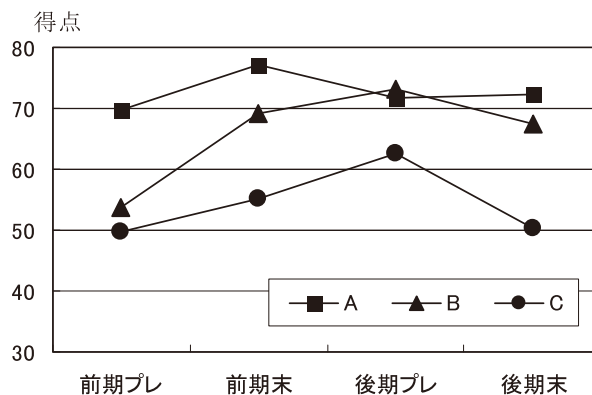


図2 各クラスの平均点の推移

前期末に受講者に対して「テキストのレベルが適切かどうか」を調査した結果を図3に示す。前期・後期ともに、「ちょうどよい」と回答したものが最も多く、「やや難しい・難しい」と答えたものが少数いるものの、学習者にとってテキストは適切であったと考えられる。

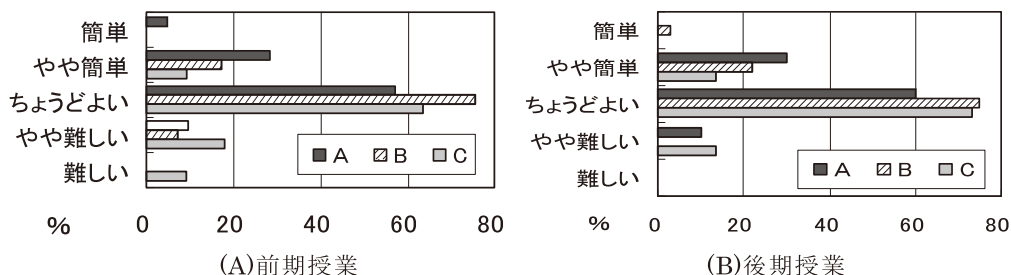


図3 テキストのレベル（学者者の感想）

そこで、テキストが「ちょうどよい」と答えたA、Bクラスの学習者に対して、前期末テストの平均点を比較したところAクラスが73.5、Bクラスが66.2であり、両クラスの平均点について有意差が認められた。テストの難易度はAクラスが最も高いことを考えれば、前期プレテストに対するAクラスの前期末テストの伸び率が低いとは必ずしもいえない。

後期プレテストは前期末テストの復習問題であり、前期末テストをどれだけ理解しているかを調べている。その結果、Cクラスの平均点の伸び率が最も高く、次いでBクラスの平均点であり、Aクラスの平均点のみが前期末テストより低くなっている。Cクラスはテキストのみの学習であり、A、Bクラスはテキスト以外の応用問題が授業内容に含まれていたことが影響したのではないかと考えられる。後期末テストでは、Aクラスの平均点が72.2、Bクラスが67.5、Cクラスが50.4であり、Aクラスの平均点が最も高くなっている。

図4は各クラスの前期・後期における授業のスピードについて調査したものである。図から、A、B、Cクラス共通して、前期・後期とも授業のスピードが「ちょうどよい」と答えた学習者が最も多い。この結果から、授業内容の難易度には差があるものの、各クラスの学習者は適切な授業スピードであると受け止めていたと判断できる。しかし、時には学習内容を十分に理解していないにも関わらず、授業のスピードが適切であると判断することもあり、その学習者にとって授業のスピードが適切であるかどうか、学習者の判断と教授者の評価は必ずしも一致しないこともある。

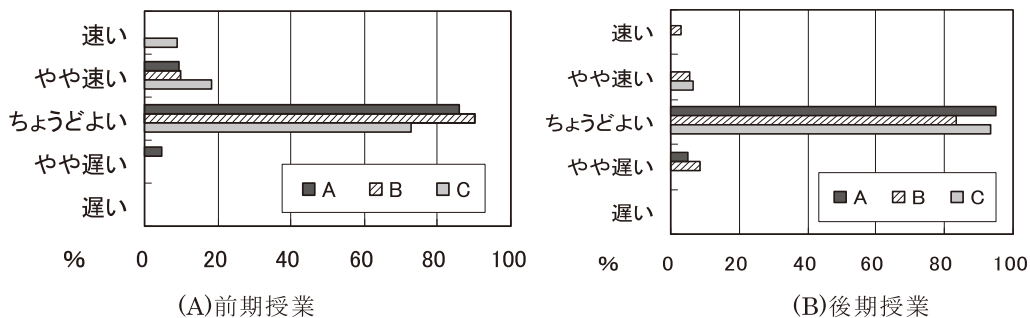


図4 授業のスピード（学習者の感想）

図5は、Aクラスにおける各テストの得点分布である。図から、前期末テストでは高得点(90.0)の学習者が多く得点分布に偏りが見られる。このクラスには1年次後期に海外留学を経験した半期留学生が3クラス中最も多く在籍し、またTOEIC等資格試験で高得点を取得している学生も複数いたため、それが出題範囲を指定しない実力テストであった前期プレテストや前期末テストの結果に表れたものと考えられる。ただし、半期留学の経験や資格試験等で高得

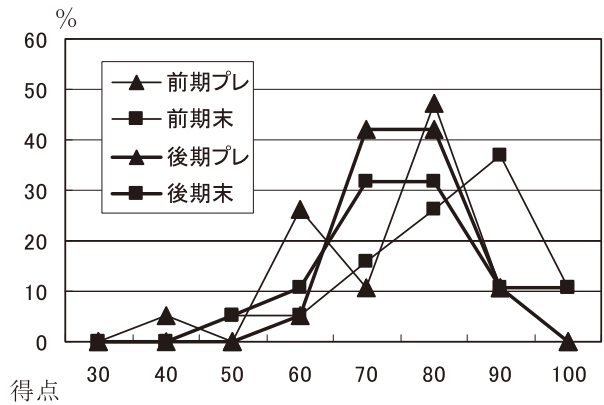


図5 各テストの得点分布 (Aクラス)

点を取得している学生のなかには、授業で取り上げた学習項目はすでに既習事項であり、特別な努力は必要ないと感じていた者もいたようである。そのため、英語の実力が試されるプレテストでは高得点をあげていながら、授業内容の理解度確認という意味合いが濃い期末テストではプレテストに比べ得点が低くなった。

一方、クラス全体で見た場合、英語力、また学習姿勢にはかなり差があり、一部ではあるが通常の授業内容を理解するのが精一杯であった学習者がいたのも事実である。ただし、確認票の提出率や期末テストの成績を見ると、こうした学生のなかに、授業が難しいという意識のためか、むしろ注意深く復習や、試験の準備をしてきたと思われるケースが見られた。

しかし、全体にはこのクラスにおける英語に対する学習意欲は高く、熱心に受講するとともに確認票の提出、自宅学習の実施はかなり徹底していた。そうした意欲的な学習環境がいずれのテストにおいても図のように全体的な高得点を示す結果を導くことに影響したと思われる。特に、後期末テストでは75点付近を中心にバランスよく得点分布している。

図6は、Bクラスにおける各テストの得点分布である。図から、授業開始時の前期プレテストでは60点台を中心としたグループがクラスの半数を占め、残りは80点台を中心とした高得点グループである。前期末テストでは、60点台を中心とした高得点グループを中心にまとまりのある得点分布を示している。後期プレテストは前期末テストの復習問題であり、前期末テストより10点程度上昇し、70点台を中心に分布している。後期末テストでは得点のばらつきが大きくなり、40点から80点の範囲に広く得点が分布している。Bクラスは、半期留学生5名を含む学年全体の5割強が割り当てられている。人数が多いこともあり、中にはむしろAクラスでも受講可能な者、もしくは下位ク

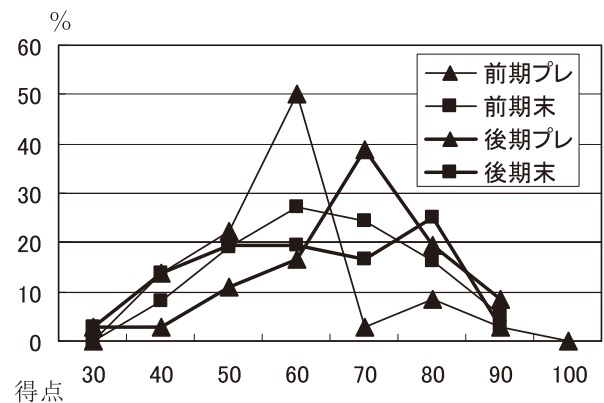


図6 各テストの得点分布 (Bクラス)

ラスで学習した方が適切かと思われる者が含まれている。それらの要因が、後期末テストの結果に影響したものと考えられる。

図7は、Cクラスにおける各テストの得点分布を示す。このクラスでは学習上さまざまな問題を抱えた受講者が多く、それがテスト結果に反映されていると思われる。前期プレテストは、60点台を中心としたグループに、80点台、40点台の小グループに分けられる。前期末テストでは、70点台のグループと40点台の低得点グループに分かれた。それらの低得点グループは後期においても低い得点を示し、学習意欲に問題があるグループであった。後期末テストでは、80点台のグループが多少いるものの、全体に50点台を中心とした低い得点分布を示した。

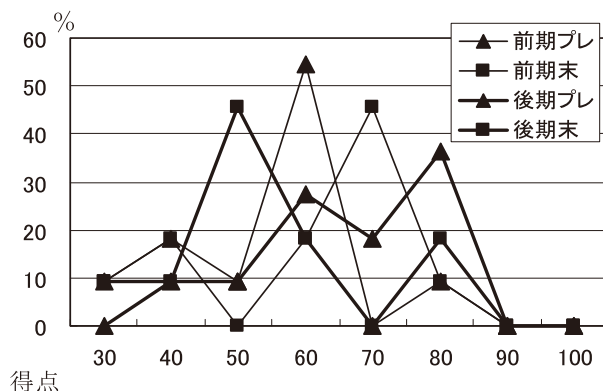


図7 各テストの得点分布（Cクラス）

Cクラスには全体の約2割が割り当てられている。クラス分けテストの結果や1年次の成績からみて、英語学習がかなり困難である、もしくは基礎力に問題があると思われる学生を対象としている。そのため受講者数を3クラス中最少の12人～15人とした。

少人数ながらも受講生には大きく二つのタイプがあり、一方は、英語力は若干低いながらも受講態度はまじめで自宅での復習をこなし、確認票もほぼ毎回提出するタイプである。もう一方のタイプは、英語力もさることながら、遅刻、欠席が多く、確認票の提出率も非常に低い学生たちである。学習以前に基本的な生活態度に問題を抱えていると思われる。あるいは、必要とされる課題をこなし、一定の規定を守ることを自身でよく理解しそれに基づいて行動するといった自己管理ができていないことが、学習結果や成績に反映されているのかもしれない。図7は、そのような学習者の学習意欲を示す結果であると考えられる。

学習実験の評価

習熟度別クラス編成における各テスト結果について分析した結果、習熟度が異なるA、B、Cクラスにおける学習者の得点分布から、学習者の学習意欲や学習者が属するクラス的环境が学習結果に大きく影響することが示された。

本論文では、自己モニタリング学習における学習実験を実施し、自己モニタリング学習が各クラスにおけるテスト結果にどのような影響を与えたかを分析した。自己モニタリング学習は、図1に示したように、毎授業後に小テストを実施、小テストの自己採点、自宅での自己確認、理解できなかった部分の自己学習、学習内容やテスト結果、自己の理解度などの自己管理を行い、その結果を確認票（毎授業時間に提出）に記入、自己の学習履歴の記録簿として確認シート（各期末に提出）に記入、などの一連の作業を実施することにより、学習状況を自己管理しながら学習を進めていくものである。ここでは、毎授業後に実施した小テスト、学習者が提出した確認票を分析することにより、自己モニタリング学習実験を評価する。

小テストは、毎授業後に学習内容を確認するための基本問題、応用問題 (A、Bクラスのみ) の2種類を実施した。表1に示したように、小テストは習熟度別クラス編成を考慮してA、B、Cクラスで異なる出題形式を採用した。

図8は、前期における小テスト (基本問題) の平均点の推移である。出題した問題数はAクラスが10、Bクラスが15、Cクラスが20と異なるために、各クラスとも100点満点に換算して評価した。クラスにより問題数が異なるので、単純には比較できないものの、Aクラスの平均点は83.4、Bクラスは78.7、Cクラスは70.9であり、Aクラスの平均点が最も高く、毎回の平均点の推移も安定している。Bクラスの平均点はそれほど低くないものの、毎回の平均点には多少ばらつきが見られ、前期小テストを見るかぎり、学習上の不安定さが認められる。Cクラスは週によってばらつきが見られるだけでなく、全体としても得点が低いことが伺える。

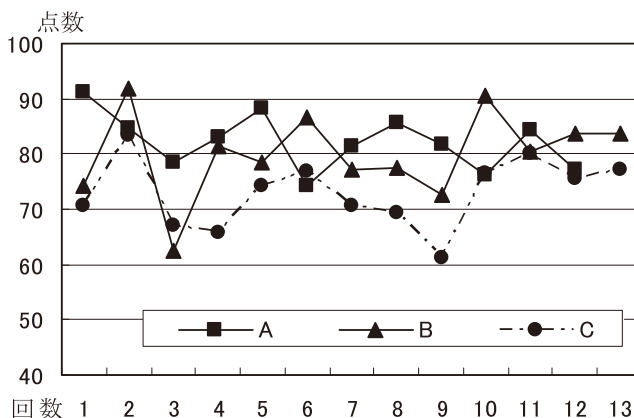


図8 小テスト〈基本〉平均点の推移 (前期)

前期末アンケートで小テスト (基本問題) が「理解できる」と回答したものについて、Aクラスの平均点は84.6、Bクラスの平均点は80.1であり、両クラスの平均点に差が認められ、Aクラスの学習者の方が理解度も高いと考えられる。また、Cクラスは平均点が低く、毎回の平均点のばらつきも大きく学習者の学習活動が不安定な状況にあるものと思われ、そのことは前章で述べたテスト結果からも分かる。

図9は、後期の小テストにおける平均点 (基本問題) の推移を示したものである。後期も前期と同様に各クラスの出題数が異なるので画一的な評価はできないものの、Aクラスの平均点は81.6、Bクラスは80.1、Cクラスは72.7であり、A、Bクラスがともに高い値を示した。A、Bクラスは各回の平均点の推移も安定している。後期末アンケートで小テスト (基本問題) が「理解できる」と回答した学習者の平均点についてA、Bクラスを比較したところ、A

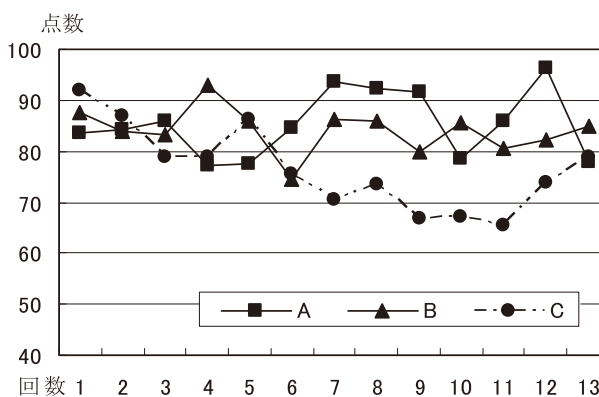


図9 小テスト〈基本〉平均点の推移 (後期)

A、Bクラスを比較したところ、Aクラスは82.4、Bクラスは82.7であり、両クラスの平均点に有意差はなく、両クラスとも学習意欲が高いものと思われる。しかし、Cクラスの平均点は後半に移行するにつれて低く推移し、学習意欲の低下が感じられる。

Cクラスは受講者数だけを見ると他のクラスに比べ少ないが、学習意欲や受講態度に問題のある学生の割合はA、Bクラスとは格段の差が高い。他の2クラスで、自宅での復習や確認票の提出が当然であるという雰囲気があったことが、さらに高い提出率を維持し、またよい意味でのクラスの学習環境を作り出していたことを考えると、Cクラスではこのもう一方のタイプの学生たちの存在がそうした積極的な学習環境を作りたくしている面があったといえる。他の2クラスに比べて、明らかに確認票の提出率が低いことがそれを裏づけている。

図10は、Bクラス（前期）からCクラス（後期）へ移動した4名の学習者の得点推移である。いずれの学習者に対してもクラス移動については、前期の成績や学習意欲を考慮して本人との面談により決定した。CクラスはBクラスに比べて学習内容やテストの出題範囲が限定されており、習熟度の低いCクラスへ移動することにより、4名の学習者に対してよりよい学習成果を期待したのであるが、実際には4名とも前期より低い得点になった。このことは、4名の学習者の自己モニタリング学習のあり方に対してCクラス全体の学習環境が影響したものと考えすることはできないだろうか。

自己モニタリング学習がどのように影響を与えたかを調査する目的で、A、Bクラスの小テスト（応用問題）を比較した。図11は、前期における小テストの平均点の推移であり、両クラスとも授業回数を重ねるごとに得点が伸びる傾向にある。また、Aクラスの平均点は57.1、Bクラスは47.7であり、両クラスの平均点に特に大きな差はないものと考えられる。

後期における小テスト（応用問題）のAクラスの平均点は63.8、Bクラスの平均点は61.2であり、両クラスの平均点には差がない。しかし、図12は後期における小テスト（応用問

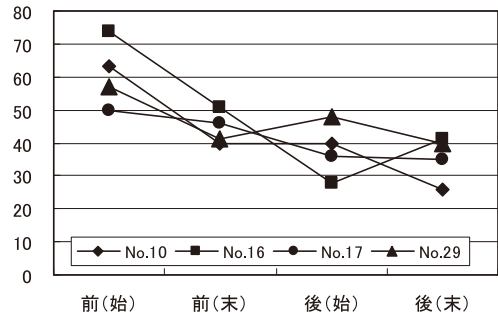


図10 移動学習者（B→C）の得点推移

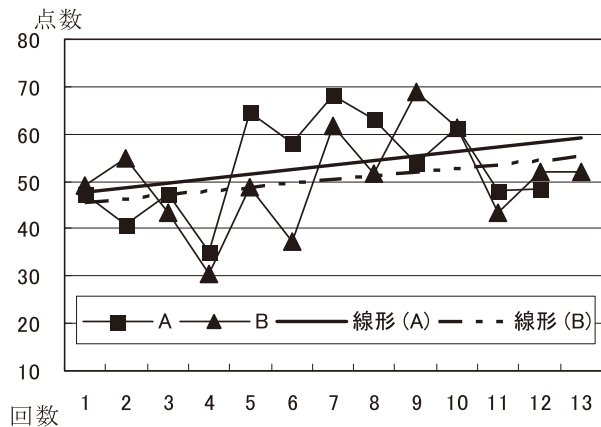


図11 小テスト〈応用〉平均点の推移（前期）

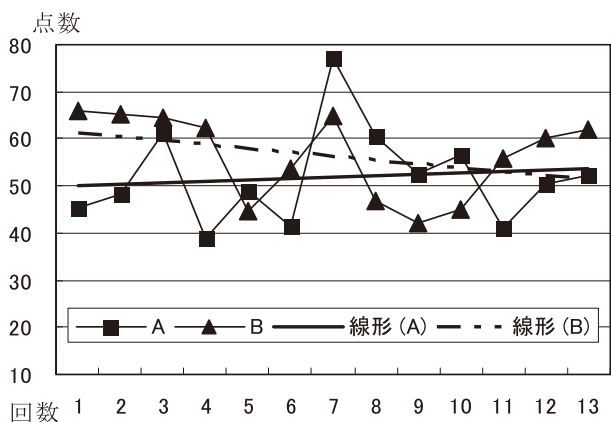


図12 小テスト〈応用〉平均点の推移（後期）

題)の平均点の推移であり、Aクラスは授業回数を重ねるごとに上昇傾向を示しているが、Bクラスは逆に低下傾向を示した。

自己モニタリング学習では、小テスト(基本問題・応用問題)で誤解答した問題について授業時間外に自宅等で理解するために再確認する作業を指示した。その結果、前期の平均誤答確認率はAクラスが85.9%、Bクラスが81.1%、Cクラスが75.6%であった。また図13は、前期における誤答問題の平均確認率の推移を示す。Aクラスは小テスト(基本・応用問題)の高い平均点が示すように、誤答問題に関する確認率の平均も高い値で推移している。Bクラスにおいても同様の傾向が見られる。しかし、Cクラスについては誤答平均確認率が100%を示すこともあるが、40%程度と低いときもあり、非常にばらつきが大きく、個々の学習者が自己モニタリング学習を安定的に実施していないことを伺わせる結果となった。

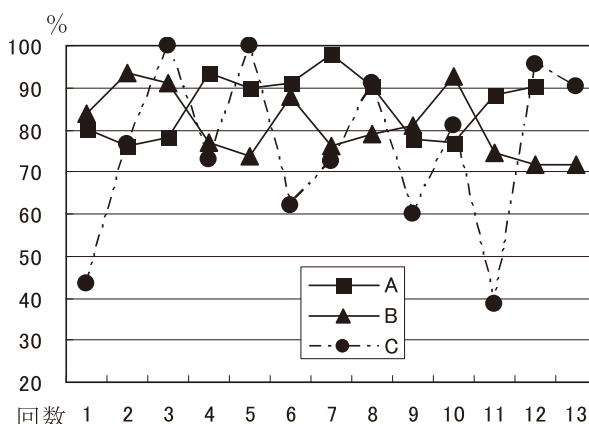


図13 誤答平均確認率 (%) の推移 (前期)

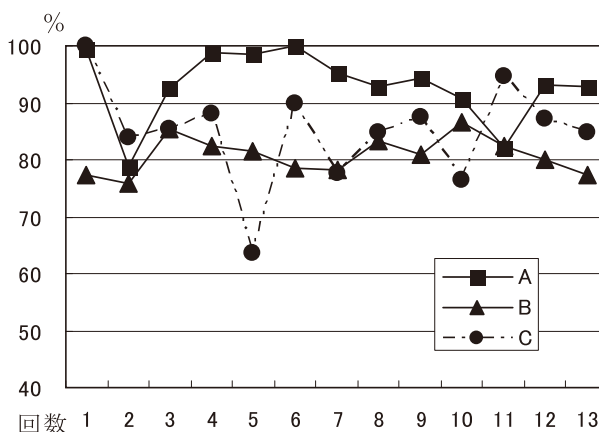


図14 誤答平均確認率 (%) の推移 (後期)

図14は、後期における誤答平均確認率の推移である。後期においては、Aクラスが高い誤答平均確認率で推移しているものの、Bクラスは授業回数が増すごとに低くなっていく傾向が見られた。Aクラスの誤答平均確認率が93.0%、Bクラスが80.0%であり、Aクラスが高い割合を示したのに比べ、Bクラスは明らかに低くなっている。

図15は、各期末に実施したアンケートの結果から、学習者が自己の学習状況を確認シートで把握しながら学習したかどうかを調査したものである。図から、「確実に、大体」把握したと答えた者が、A

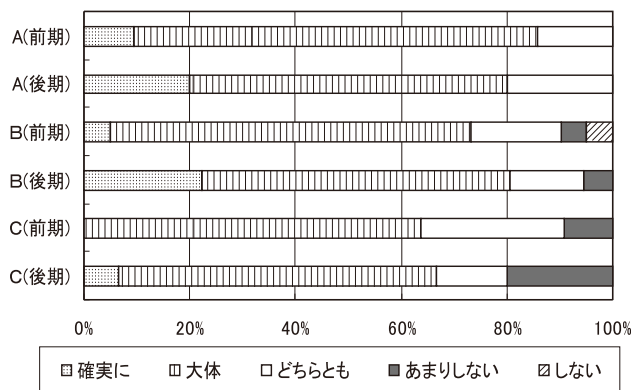


図15 確認シートで自己の学習状況の把握

クラスでは80%以上、Bクラスでも70%から80%程度であった。しかし、Cクラスでは把握したと回答した者が60%程度に止まり、あまり把握しない（後期）と答えた者が20%もいた。

Aクラスは他のクラスより難しい課題を与えられたにもかかわらず、自己モニタリング学習で指示されたプロセスを確実に実行した結果、小テストや期末テストの値が高くなったものと考えられる。しかし、Cクラスではあまり学習意欲のない学習者がいたために、クラス全体の学習環境にも悪影響を与え、また学習意欲の欠如から自己モニタリング学習を行わない学習者がいたため、結果的にあまり学習成果を上げることができなかったものと考えられる。

以上、小テスト（基本・応用問題）の結果や自宅での誤答平均確認率の分析結果から毎回の授業に対する自己学習を確実に実施することにより、学習成果が向上したという結果を得た。

おわりに

著者らは、過去に実施した学習実験や本論文の学習実験成果から、自己モニタリング学習の有効性を示すことができたものと考えられる。

本論文では、学習者の英語能力が学習意欲に影響するものと考え、習熟度別クラス編成を採用した自己モニタリング学習の実験を実施した。自己モニタリング学習では、学習における学習者自身の自己管理がいかに大切であることを示し、同時にクラスの学習環境や他の受講生の受講姿勢が学習者の学習意欲に影響を与えることを示した。

本来、自己モニタリングは対人関係や自分が置かれている教育環境の中で行うことにより、自分の行動や感情を自己コントロールする行為であり、本論文で示した自己モニタリング学習はそのような学習環境の構築にも役立つものと考えられる。

今後、自己モニタリング学習実験をさらに重ね、学習者の学習意欲の向上を図るだけでなく、学習者のおかれた学習環境に関する分析を行い、より実用的な教授法を構築することを目指したい。

参考文献

- 1) 若松養亮、大谷宗啓、小西佳矢：小・中学生における学習の有効性認知と学習意欲の関連、教育心理学研究、52、pp.219-230 (2004)
- 2) 市川伸一：学習動機の構造と学習感との関連、日本教育心理学会第37回総会発表論文集、pp.177 (1995)
- 3) 植木理恵：自己モニタリング方略の定着にはどのような指導が必要か——学習観と方略知識に着目して——、教育心理学研究、52、pp.277-286 (2004)
- 4) 中尾敬、宮谷真人：自己モニタリングによって自己意識が活性化する、日本心理学会69回大会、認知3AM068 (2005)
- 5) 海保博之：「オペレータの自己モニタリング力を高める」<http://www.human.tsukuba.ac.jp/~hkaiho/monitaringe.html>
- 6) 小谷津孝明、尾崎正弘、鈴木恒男、湯本典子：認知的理解学習モデルの構築とCAIシステムへの応用、平成4・5年度文部省科学研究費補助金報告書一般研究費（B）(04451028)、1994.3
- 7) 川田博美、武岡さおり、田口継治、杉村藍、尾崎正弘：能力別クラス編成による効果的な情報教育の実施について、教育情報研究、第19巻第2号、pp.17-26 (2003)
- 8) 尾崎正弘、杉村藍、足達義則：学習者の自己管理が学習に及ぼす影響について、中部大学経営情報学部論集、19、pp.67-82 (2005)
- 9) 杉村 藍、武岡さおり、尾崎正弘：自己モニタリングが英語学習に及ぼす効果について、名古屋女子大学紀

要 人文・社会編 第52号、pp.133-144 (2006)

- 10) 橋本信也、尾崎正弘、小山幸治、武岡さおり、足達義則：学習者の知識や能力が『情報教育』に与える影響について、日本教育情報学会第21回年会論文集、pp.180-183 (2005)